## Ⅱ　校内研修

### 1　研修主題及び設定の理由

～研　修　主　題～

主題　主体的に取り組み、確かな学力を身に付けた生徒の育成

副主題　～各教科における考えを表現し合い深め合う協働的な学びを通して～

**生徒の実態との関わり**

・昨年度までの校内研修を通して、生徒は ICT を活用して自分の考えを表現し他者と考えを比較することが無理なくできるようになってきた。

・学校評価アンケートでは、生徒の自己肯定感の低さが課題として見られた。

・教師の指示に従って取り組む生徒は多いが、理論を積み上げて考えを深めていく生徒は限られている。

**指導の在り方との関わり**

・自己肯定感を高めるために、生徒が他者と関わる中で、自分の考えが尊重された、役立ったという実感がもてる機会を多くしていくことが必要である。

・主体的に取り組む姿勢や確かな学力の育成のためには、考えを言語化し個の学びを深め、さらに他者と交流して他の見方を知ることで、相対的に自分の学びも深めることが必要である。

### 2　研修内容・方法

(1)具体化した目指す生徒像

主体的に学習に取り組み、多様な他者と考えを表現し合い深め合うことができる生徒

(2)共通実践する手立て

・どのような他者と関わるか（子ども同士、地域の人々、専門家等）、どのような場面で協働的な学習を取り入れるのかを明確にした授業構想・授業改善を行う。

・協働する際には、話し合いや活動の目的を共有し、それが必要感のある題材設定になるように工夫する。

・１人１台端末に導入された AI 教材 Qubena（キュビナ）を５教科の授業や放課後学習、家庭学習等で活用し、生徒が自分のペースを大事にしながら、主体的に学習が進められるようにする。

## 3　研修計画・経過報告　指 は、指導案検討　　授 は、研究授業・授業研究会

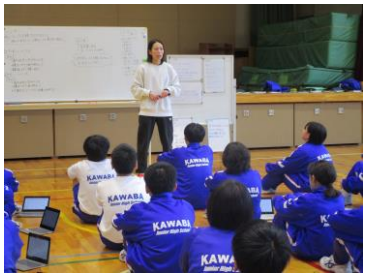
| 月日 | 研修計画［内容］ | 経過報告［○研修の視点（上段）・明らかになったこと（下段）］ |
|---|---|---|
| 4.6 | ・主題・副主題、共通実践する手立ての検討（推進委員会①） | ○研修主題や内容、方法について<br>・生徒の実態や課題を踏まえ、主題は継続していき、昨年度までの成果を生かしながら、授業改善に繋げていく研修にすることを確認した。 |
| 4.17 | ・研修主題の検討 | ○生徒の実態や課題の分析、目指す子ども像と共通実践する手立ての吟味。代表授業者の決定。<br>・「非認知能力育成に向けたモデル校による実践研究」を川場小とも連携して取り組んでいくことを確認した。また協働的な学びを取り入れて他者と関わりながら生徒の表現力や思考力をとともに学力を伸ばしていく必要がある。 |
| 5.1 | ・研修計画の確認 | ○１人１授業の計画の確認<br>・研修の見通しをもってもらい、協働的な学びを取り入れた研究授業を行っていただくことを確認した。 |
| 5.29 | ・指導主事訪問Ａと１人１授業に向けての確認 | ○研究授業に向けた指導案形式の確認<br>・A 訪問の指導案形式の変更点の確認。また１人１授業実践の指導案に明記してほしいこと、共通実践する手立てについての共通理解を図る。 |
| 6.5 | ２年社会　授「産業の発達と幕府政治の動き」 | ○徳川綱吉の政治や元禄文化の特色を調べ、まとめていく協働的な学習はどうだったか。<br>・１時間の授業のねらいは、１つになるようにする。 |
| 7.3 | 授指導主事訪問Ａ | ○必要感のある題材設定、他者と関わる協働的な活動を取り入れた授業を実践<br>・考えを表現し深め合う姿を教科毎に設定する。それを想像し手立てを考える。 |
| 7.10 | ３年美術　授鑑賞「４コマ物語をつくろう」 | ○作品の解釈は多様であることを知り、美意識を高め見方考え方を深めたか。<br>・話合いの観点を与え、それに沿った意見交流になるようにする。 |
| 9.20 | 指Ｂ訪の指導案検討（推進委員会②） | ○本時で行う学習課題は生徒が解きたい、考えたいと思えるものであるか。<br>・疑問をもたせ、その根拠を明らかにしていくことはグループ内で活発な意見交流に繋がる。モデルやシミュレーションソフトの活用も有効である。 |
| 9.22 | １年国語　授「スピーチ　構成を工夫して魅力を伝える」 | ○スピーチメモを作成し、アドバイスし合うことを通して、自分の考えや根拠が明確に伝え考えることができたか。<br>・三角ロジックでもう一度事実の量を増やすと説得力を増すと生徒が気付く。 |
| 10.2 | １年道徳　授誠実な生き方「裏庭のできごと」<br>非認知能力育成についての研修（岡田教諭）<br>指Ｂ訪の指導案検討（全体） | ○誠実に生きるためにはどんなことが大切なのか自主的に考え判断するための道徳的判断力を育てることができたか。<br>・生徒が葛藤している部分についてより深く考えさせるために、話合いの手立てを工夫する。<br>・岡田教諭の報告を通して、授業を主とした非認知能力の育成を図っていく方向性であることを職員で共通理解した。<br>○単元全体の流れはどうか。協働的な活動ではどのような支援を行うか。 |
| 10.23 | ３年数学　授「相似」 | ○２つの三角形が相似を三角形の相似条件を根拠にして説明できたか。<br>・高い難易度の課題における支援。解く必然性のある課題は時間をかけて扱う。 |
| 11.14 | ３年理科　授指導主事訪問Ｂ「地球と宇宙」月の見え方 | ○自然と協働するような課題だった。課題に対して生徒全員がよく考え、教え合い、質問し合い集中して取り組めていた。<br>・「月の形」「見える時間」「見える方角」などが変 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 化するため、考えをまとめきれない生徒が多かった。「月の形は正しい」など条件を固定して、視点を整理する必要があった。 |
| 11.27 | １年<br>体育 | 授「バレーボール」 | ○良いチームを見せて、そのチームが意識したことを問いトライさせ全体で協働できた。<br>・必要なことは「具体的に」という指示のもと書き出せると良かった。 |
| 12.11 | １年<br>英語 | 授「Our Project2」 | ○目的・場面・状況がしっかりあって、生徒が相手意識をもって意欲的に学習に取り組めた。<br>・ICT を用いて個から全体へ共有することのよさ、人と人とで関わり伝え合うことのよさとバランス |
| 1.22 | ・本年度の取組の総括、次年度の研修に向けた現状と課題の把握・分析<br>＜小中合同＞ | | ○研究紀要（川場の教育）の原稿検討校内研修のまとめにおける検証と確認、本年度の取組の総括を行った。<br>○非認知能力育成に向けて研修の方向性の確認と非認知と関わる行事についてグループで考える。 |
| 3.18 | ・研修のまとめ・来年度の校内研修の方向づけと確認 | | ○研修のまとめ・来年度の校内研修の方向付け |

○田村俊一教諭は今年度へきセンの実践として１人１授業と兼ね、１０月２５日に授業公開を行った。

資質向上研修

| 月日 | 研修計画［内容］ | | 実　施　内　容 |
|---|---|---|---|
| | 区　分 | 講　師 | |
| 5.1 | ICT 活用に関する研修 | 川場小学校教諭 | ・AI 型教材 Qubena の活用について（概要・効果、学習方法、利用場面、今後の課題、川場小学校の状況等） |
| 5.29 | 不審者想定避難訓練での安全研修 | 安全主任 | ・校内での不審者対応についていざという時、臨機応変に対応できるよう幅広い知識を身につけることを目的に行った。 |
| 7.25 | 学校安全に関する研修 | 養護教諭 | ・心肺蘇生法、ＡＥＤの使用方法、救急車要請の流れの確認を行った。 |
| 11.27 | 小中一貫校に向けた研修 | 川場小学校教諭 | ・Ｒ７年度からのカリキュラム、校時、組織など、これまでの部会で話し合われたことや決定事項について共通理解を図る。 |



## 4　実践のまとめと今後の課題

本校では、前年度まで３年間指定を受けていた「ICT 活用促進プロジェクト実践推進校」としての研究を生かし、前年度の設定した主題「主体的に取り組み、確かな学力を身に付けた生徒の育成」に向けて引き続き取り組んだ。副主題の中では、新たに「考えを表現し合い深め合う協働的な学び」を加え、生徒達が他者と関わり合う活動を取り入れた授業実践を中心として、研修を進めてきた。

また、令和５年度から県教育委員会の指定事業「非認知能力育成に向けたモデル校による実践研究」として川場中学校が川場小学校とともに指定校となった。この趣旨を踏まえた研修主題でもあるため、共通実践する手立てにポイントを盛り込んだり、資質向上研修に関連した内容を取り入れたりしながら職員の共通認識を図りながら研修を行うことができた。

（１）成果

○授業構想では他者とどのように関わるのか、どのような場面で協働的な学習を取り入れるのかを明確にした上で授業を行ったことで、個で完結する学習ではなく、他者に向けて自己の考えを表現し、他者の考えを知ってさらに深めることができる学習になっていた。関わる相手は生徒同士であったり、学校外の人に向けてだったりと、教科の特性がある中でも工夫して相手意識をもたせるようにできた。

活動の前にフィリピンの中学生からのビデオレターを確認する場面（英語）

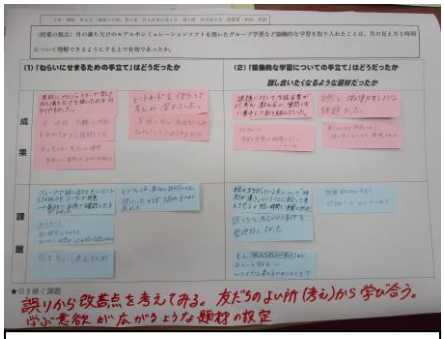
○単元や本時の目標・課題を達成するために必要感のある題材設定の工夫がされていたことで、生徒の学習意欲が高まるような授業を展開できた。また多くの授業で単元目標を単元の導入で全体に共有し、１単位時間毎のめあてを示し、振り返りシート等を活用して生徒の学びの蓄積をしてきたことで、生徒自身ができたこと、次時への課題を自覚し、教師からのフィードバック等も受けて自己肯定感を高められるようなものになっていた。

生徒が本時の振り返りを記入する場面（体育）

○Qubena については学級や教科で活用を進め、多くの場面で取り入れてきたことで、生徒が自主的に自分でやるところを選んで学習ができるようになった。個別最適な学びの実現と、既習事項の振り返りを短時間で行うことに役立った。

○１人１授業の後に毎回行った授業研究会では、本時の協働的な学習を中心にグループ協議を行ったことで、職員同士で活発な意見交流がなされ、回を重ねる毎に研修が深まっていった。例えば、話合い活動の際の教師の関わり方や話し合う視点などが明確にして授業に臨むことなど、成果と課題を引き継ぐことができた。

授業研究会の様子

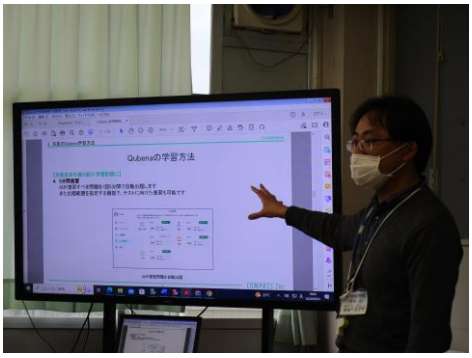



グループ協議用シート

（２）課題

●「考えを表現し合い深め合う協働的な学び」のためには、生徒が授業や活動を通して学んだことを記録し、次に取り組む際に振り返ったり、生徒同士でこれまでの取り組みや内容について伝え合ったりする機会をもつことが重要であることを再認識した。どのように振り返れば良いのかといった教科毎の視点、振り返りのレポートや作文・シート等の蓄積の仕方について検討していく必要がある。

●Qubena は学習履歴として残っていくが、学習の積み重ねが見えづらい。生徒の学習への主体性を高めるためには、達成感を味わえる工夫と学習したことの見える化が課題である。

（３）課題解決に向けての今後の取組

来年度も引き続き非認知能力の育成に向けたモデル校として実践研究に取り組んでいくため、教師間で非認知能力がどういった活動、姿に繋がっているのか、共通理解を進める。またこれまでの成果を生かし、授業改善を行い、非認知能力向上とともに学力の向上も目指す。